

4月例会要旨

場所：東京大学駒場キャンパス 12号館 1213

時間：4月23日（土）13時～17時30分

発表者・発表題目

- 1) 土屋智子（日本女子大学・院）「ハワイへ渡った戦争花嫁：日米の戦後政治の狭間で形成されたイメージと経験」 <コメント：有賀夏紀（埼玉大学）>
- 2) 小田悠生（東京大学・院）「米国 1924年移民法におけるメキシコ人の位置」 <コメント：中川正紀（フェリス女学院大学）>
- 3) 竹内愛子（東京大学・院）「アジア系アメリカ人芸術家の活動と日系アメリカ人戦時収容所の記憶再構築」 <コメント：島田法子（日本女子大学）>
- 4) 藤岡真樹（京都大学・院）「冷戦初期 M.I.T.における人文・社会科学部の設置」 <コメント：寺地功次（共立女子大学）>
- 5) 南修平（一橋大学・院）「アメリカにおける愛国主義の諸相の一考察 — ニクソン政権とニューヨークの建設労働者の動きを中心に」 <コメント：中條献（桜美林大学）>

毎年恒例となっている修士論文報告会を4月例会として開催した。全国学会化したこともあり、東京地区の4名に加え、本年は京都からの参加者1名を迎えることができた。また、昨年同様、報告者にコメントを希望する会員を指名してもらう形式を踏襲した。その結果、充実した5本の個別報告に対して、当該分野の専門家による建設的かつ刺激的なコメントがよせられる有意義な例会となり、聴衆も今年度最多の70名ほどが集まった。

まず1)の土屋報告では、戦後空間においていわゆる「戦争花嫁」に纏わり作られたイメージ、ステレオタイプの形成過程と、彼女らの経験がインタビュー取材などを手がかりに考察された。有賀コメントでは、戦後の日米の政治状況の影響下のなかで共振する花嫁イメージと実体験の語りの実証的な分析を評価する一方で、日米間でのイメージの相互の影響を考えると、戦後のドイツとの比較史的考察により日本的イエ制度の特殊性などの歴史的意味を問う糸口がみえてくるのではないかと、との提言がなされた。

2)の小田報告は、1924年移民法の制定過程を、米墨国境の出入国管理に関する西半球移民・メキシコ系移民の扱いに焦点を当てて分析し、従来の狭い排日移民法としての歴史的位置づけに修正を迫るオリジナルな論点が提起された。中川コメントでは、政治史的分析としての高い評価をしたうえで、自身の社会労働史的視点からの同法の意味についての質問が出され、歴史的文脈の多義性が示唆された。

3)報告の竹内報告では、日系米国人の戦時収容所の記憶と語りの再構築が、現代のアジア系アメリカ人芸術家らの活動との関連性のなかで考察された。フランク・チンらを取り上げることで、従来のJACL中心の歴史観とは異なる声を掬い取る興味深い報告となった。島田コメントでは、こうしたリドレス運動が、全世界的な過去への贖罪の動き（奴隷制へのクリントンの謝罪など）と関連付けて理解される必要があるとの意見が出され、越境者としての芸術家への視座の可能性が指摘された。フロアからも、右翼・左翼の分類や帰米の扱い、芸術家と活動家の分類など様々な質問がだされた。

第4報告の藤岡氏は、冷戦期の米国大学における人文・社会科学の拡充を戦後冷戦史の中に位置づけることを目的に、具体的にはM.I.T.の事例を取り上げ報告した。修士論文では扱った「冷戦的大学」という連邦政府に研究資金を依存する研究重点大学の興隆については、時間の関係もあり言及されなかったため、寺地コメントでは、従来の大学教育史にはないこの視角の明確化が今後の研究では必須であり、少なからぬ可能性を秘めていることが指摘された。フロアからも、米国の技術政策史や大学教育史の観点からの質問が寄せられた。

第5報告の南報告では、ニューヨークの建設労働者組合の労働者が反戦デモ隊を襲撃しニクソン支持を訴えた暴動の分析を、建設労働者の固有の労働世界を解明することで解き明かしていき、アメリカ

カ合衆国における愛国主義的行動が問い直された。中條コメントでは、組合史料を使った緻密な実証研究として本論を評価した上で、結論部分についてはあえてボドナーの愛国主義論に還元して考察する必要はなかったのではないか、個別民衆文化と公式文化に二分するボドナーの論を批判的に乗り越える必要があるのではとの指摘があった。